きらり人

生き生き人生　わくわく私

昭和をテーマにした人形師

清水　美加さん（大平）

清水さんの作る人形は、懐かしい昭和の時代を感じさせます。昭和30年。めんこで遊び、駄菓子屋に通っていた懐かしい時代です。

ふっくらした赤いほっぺの人形たちは、七輪でさんまを炙ったり、学生帽をかぶってあくびをしたり、今も昭和の時代を生きています。

清水さんが人形を作り始めたのは、高橋まゆみさん（創作人形作家）の作家展を見たことがきっかけです。長野の田舎で暮らす、もんぺを履いたおばあちゃんの人形は、昭和好きの清水さんの心を射抜きました。清水さんは、祖母の家がまだまきを割って五右衛門風呂を沸かすことや、昭和好きの母の影響で、昭和の時代にすっかり魅せられていました。

美術科の高校を卒業し、手芸も得意だった清水さんは、その後半年間、人形教室に通い、後は独学で今の人形作りのスタイルを確立しました。

清水さんの人形は、まず発泡スチロールの玉に粘土を盛って、頭を作ることから始まります。次に体の芯を針金で作り、体はキルト芯という綿で巻きます。手と足は粘土で作り、一番外側に布を貼って表情を作ります。

「作るのは手が一番難しいです。手は顔以上に表情が出ます。お年寄りの手はごつごつしていて、手がうまくいかないと人形全体がよくなりません。作り出すと細かいところまで気になってしまいます。細かいところまで手を入れないと感動はしてもらえません。細かく細かく作っていきたいですね。」

毎日、子どもを寝かせてから2・3時間、人形と向き合います。2体同時に作り、完成まで一か月半。昼は仕事をして帰ってきたら家事をして、夜は疲れて子どもと一緒になって寝てしまうこともあります。それでも、朝2時に起きて人形を作るほど、人形作りに情熱を注いでいます。

「忙しくてできないと、手を動かしたくてもやもやします。できあがってくるとすごく楽しくて、人に見てもらいたくなります。」

今年の7月には、西予市宇和町のギャラリー喫茶「トンカラリー」で、初めての個展を開き、大盛況で幕を閉じました。人形たちの豊かな表情の理由は「**見て笑ってもらいたいから**」という清水さんの期待通り、来てくれたお客さんは、「昔ほんとにこんなんやった！」とみんな笑顔で当時を懐かしんでいました。嬉しそうに話してくれるお客さんの話が、また次の人形作りに活かされていきます。

「将来は、もっとたくさんの人形や民家、商店街を作って、一つの小さな町を作りたいです。そして日本全国で個展をして回りたい。」

と、夢を語って頂きました。

◀下の２人は息子さんたちがモデル。

※来年の夏も「トンカラリー」で個展開催予定。
ホームページ http://doll.mikan-koubou.com/
ブログ http://blogs.yahoo.co.jp/mikandoll_koubou